

教職実践演習必修化に向けた試行段階の取組

津野 治彦*

1 はじめに

平成18年の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において提言された教職実践演習は、「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」により、平成22年度入学者から必修となった。平成25年度の完全実施に向けて、指導内容及び指導体制を整備することが喫緊の課題となっている。

「今後の教員養成・免許制度の在り方について」では、教職実践演習について次のように提言されている。

- ・教員として最小限必要な資質能力の全体について、確実に身に付けさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認するために設定する。
- ・教員として求められる四つの事項「①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科等の指導力に関する事項」を含める。
- ・授業方法については、役割演技（ロールプレーイング）やグループ討議、事例研究、現地調査（フィールドワーク）、模擬授業等を取り入れることが適当である。
- ・指導教員については、教科に関する科目と教職に関する科目の担当教員が、共同して、科目の実施に責任を持つ体制を構築することが重要である。
- ・履修時期については、すべての科目を履修済み、あるいは履修見込みの時期（通常は4年次の後期）に設定することが適当である。

教職実践演習の履修を通して、学生は、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待されている。¹⁾

2 上越教育大学の取組

上越教育大学では、平成19年度から教職実践演習を試行してきた。平成20年度には、答申で示された四つの事項を考慮した、教職実践演習の到達目標である「上越教育大学スタンダード」を公表した。

試行4年目となった平成22年度には、教職に関する内容を11時間、教科に関する内容を4時間、計15時間実施した。そして、それまで教職に関する内容について実践した授業を基にして、教職編テキスト案を作成した。テキスト案には、本授業で確認するスタンダード、ねらい、展開、自己評価の観点、ワークシート、参考資料等が記されている。

平成23年度は、上の内容に加えて授業シナリオを作成することにした。授業シナリオは、授業担当者用で、指示や説明等を話し言葉で書いたものである。小学校や中学校現場を経験していない大学教員でも授業が担当できるように配慮した。必修化となり授業担当者が拡大したときのためである。今年度は、そのテキスト案と授業シナリオを基にして実践しながら、修正・改善を加えてきた。教職に関する内容についての取組の概要は、次のとおりである。

- | | |
|-----------------|-----------------------------------|
| (1) 履修時期 | 平成23年度は前期に実施。 |
| (2) 履修者 | 学部4年生及び教育職員免許取得プログラム大学院生の希望者約80名。 |
| (3) 教職編履修者の参加形態 | 1グループ12名。全7グループ。 |
| (4) 教職編の授業担当者 | 特任准教授（新潟県教育委員会から派遣された小中学校教員）7名。 |
| (5) 教職編11回の授業内容 | 次表参照 |

* 学校教育実践研究センター

表1 平成23年度教職実践演習教職編授業内容

グループ	1限 8:40~10:10			2限 10:20~11:50			
	A	B	C	D	E	F	G
教室	人 105	人 106	人 107	人 101	人 105	人 106	人 107
第1回 4/21	〈演示〉 始業式後の学級開きの所信表明で何を話しますか？						SD I 1 2 3
第2回 4/28	〈ロールプレイ〉 ちょっと気になる子どものいる学級での対応						SD II 1 2 3 III 1 2 3
第3回 5/12	〈集団討論〉 学級担任としてどう対応するか？～いじめ・不登校・特別支援教育～						SD I 2 III 1 2 3 4
第4回 6/9	〈集団討論〉 学級内で日々発生する様々な問題に学級担任としてどう対応するか？						SD I 2 III 1 2 3 4
第5回 6/16	〈ワークショップ〉 事故が起きては遅い！プールの安全指導について考えよう						SD I 3
第6回 6/23	〈ワークショップ〉 小中連携による中一ギャップへの対応をどうするか？						SD III 2
第7回 6/30	〈ロールプレイ〉 突然、保護者から苦情電話が！あなたはどうか対応しますか？						SD II 1 2 3
第8回 7/7	〈ロールプレイ〉 同僚との連携、保護者との連携はどんなふうにしますか？						SD II 1 2 3
第9回 7/14	〈ワークショップ〉 校外学習へ出かけよう！そのために考えておきたい10のこと						SD I 1 2 3
第10回 7/21	〈ロールプレイ〉 自分の身は自分で守る！子ども自身の危機管理能力を育てよう！！						SD I 2 II 2
第11回 7/28	〈ロールプレイ〉 ハッとしてグット！全校朝会で月の生活目標の指導をしよう！！						SD II 1 III 2

※ 上記 SD○ は、スタンダードのどこに焦点付いているかを示す。

- SD I 教員として求められる使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
- SD II 教員として求められる社会性や対人間関係能力に関する事項
- SD III 教員として求められる幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
- SD IV 教員として求められる教科等の指導力に関する事項

(6) 教職編の授業概要

教職編テキストを受講生に配布し、授業担当者は授業シナリオを基にして授業を進めていった。

授業後、7名の授業担当者が、時間配分や展開、説明・指示の言葉等について問題点を出し、授業シナリオを修正していった。

また、毎時間、受講生には右の自己評価カードを書かせ、スタンダードに基づく自己評価を集計した。その結果を基に、設定したスタンダードや学習内容、評価の観点が適切かどうか検討し、教職編テキストを修正していった。受講生の自己評価が一番低かったのは、第2回の「ちょっと気になる子どものいる学級での対応」だった。発達障害のある児童への指導をロールプレイで行った。模擬体験であったが、どのように対応してよいのかが分かっていない自分を自覚し、発達障害のある児童への対応の難しさを実感した結果であると考える。

教職実践演習自己評価カード (第 / 回)

(A) グループ 学籍番号 () 名前 ()

1	評価の観点に基づく自己評価 (○を付ける)				S	A	B	C	D
2	スタンダードに基づく自己評価								
(I - 1)	力がなかった	あまり力がなかった	少し力が付いた	とても力が付いた					
(I - 2)	力がなかった	あまり力がなかった	少し力が付いた	とても力が付いた					
()	力がなかった	あまり力がなかった	少し力が付いた	とても力が付いた					
()	力がなかった	あまり力がなかった	少し力が付いた	とても力が付いた					
3	自由記述 (自分自身のよい点や課題点を見付けたり、学んだことをまとめたりしましょう。)								
全体の前で話しことは、7:11に(2人が)自分でもよく緊張(7:11)。この 東洋には初対面の子でも人数がいれば、思い通りに話すことは可能。聞いたり してもらえれば、自分の教師としての自覚と責任を持ち、話し相手になり たいと思いつつ。また内容も未熟だし、話し方もまだよくない、?はありますか。 みんなから(13日)の4/28(1)はいいと思います。お話しお聞きします。									

3 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

教職編テキスト案を基にした実践を通して明らかになった成果と課題を分析し、教職実践演習必修化に向けた方向性を探る。

(2) 研究の方法

今年度の授業に参加した学生に次の調査を実施する。

調査① 教職編授業11回終了時（7月）

授業の内容や方法について、教職編11回の授業を4段階で評価する。

調査② 教職編授業11回終了時（7月）

教職編11回の授業内容についての評価（11の授業のうち、とてもためになった、もっと学びたかったものを三つ選んで1～3の順位を付ける）と、今後求める内容や感想を自由記述する。

調査③ 教職編授業1回目（4月）と11回目終了時（7月）

教職編11回の授業を通して、どのような力が付いたのかを、スタンダードに照らして学生が自分自身を評価する。

4 結果と考察

(1) 調査①

表2 教職編の授業内容及び授業方法についての評価

	そう思う	だいたいそう思う	あまりそう思わない	ぜんぜんそう思わない
ア 意欲的に取り組むことができた。	76	21	3	0
イ 将来教師となったときに役立つ内容であった。	87	13	0	0
ウ ロールプレイング、KJ法、集団討論など、多様な授業方法を知ることができた。	71	26	3	0
エ 教員採用試験にも役立つ授業だった。	64	36	0	0
オ 授業に参加して、新しい人とのつながりをもつことができた。	77	15	5	3
カ コミュニケーション能力を高めることができた。	69	31	0	0

表中の数値はパーセント

質問項目アの結果から、受講生は授業に意欲的に参加していたことが分かる。「あまりそう思わない」と回答した学生は、自由記述に「とてもためになりました。朝早くて、頭が回らなくて大変でした」と書き、自分自身を反省していた。今年度は、まだ試行段階で選択科目であった。教職への意欲が高い学生が受講していることも高評価の要因として挙げられる。

教職編11回の授業内容は、小中学校勤務を積んだ特任准教授が考えたものである。学生が教職に就いたとき、特に新採用時に知っておいた方がよいことを授業内容とした。質問項目イとウの結果から、教職編11回の授業内容及び授業方法は、学生にとってためになるものであり適切だったことが分かる。また、質問項目エの結果にもあるように、教員採用試験の面接や集団討論、場面指導でとても役に立ったと答えた学生が多かった。しかし、ウについて「あまりそう思わない」と回答した学生の次の指摘がある。

- ・ロールプレイやワークショップなどの活動を通して実践できるのはよかったが、最終的に指導する先生の教育観を学生に押し付けるだけの授業になっていたように思う。もっと学生の意見を生かし、対話から個々の教育観を育てていくような授業にしてほしい。

授業では、各担当が学校現場での経験を生かし、学生に必要なだと思ふことを伝えている。担当者の個性が色濃く出る授業である。学生がより主体的に参加できるように、授業シナリオを改善する必要がある。

質問項目オは、それまであまり交わることがない学部生と教育職員免許取得プログラム大学院生が一緒のグループとして活動することの効果を図るためのものである。十分とは言えないが、コミュニケーション能力が高まったとの回答が多いのは、グループ編成の効果も考えられる。

(2) 調査②

学生が選んだ三つの授業を1位3点、2位2点、3位1点とし、得点を合計した。また、1位として選択した人数を授業回数ごとにまとめた。

表3 教職編11回それぞれの授業内容についての評価

	得点	1位の数
①始業式後の学級開きの所信表明で何を話しますか？（演示）	29	6
②ちょっと気になる子どものいる学級での対応（ロールプレイ）	28	3
③学級担任としてどう対応するか？～いじめ・不登校・特別支援教育～（集団討論）	44	10
④学級内で日々発生する様々な問題に学級担任としてどう対応するか？（集団討論）	20	5
⑤事故が起きては遅い！プールの安全指導について考えよう（ワークショップ）	6	3
⑥小中連携による中一ギャップへの対応をどうするか？（ワークショップ）	11	3
⑦突然、保護者から苦情電話が！あなたはどう対応しますか？（ロールプレイ）	41	7
⑧同僚との連携、保護者との連携はどんなふうになりますか？（ロールプレイ）	18	1
⑨校外学習へ出かけよう！そのために考えておきたい10のこと（ワークショップ）	17	1
⑩自分の身は自分で守る！子ども自身の危機管理能力を育てよう！！（ロールプレイ）	7	0
⑪ハッとしてグット！全校朝会で月の生活目標の指導をしよう！！（ロールプレイ）	16	0

表中の○囲み数字は授業回数を表す

【この授業で扱ってほしい内容や方法があったら書いてください。（自由記述）】

- ・新採用としての子どもへの対応の仕方、学級崩壊した学級への指導（3人）
- ・特別なニーズのある子どもへの対応（2人）
- ・保護者への対応の仕方（2人）
- ・学校行事（運動会、卒業式等）での指導（1人）
- ・家庭訪問の仕方（1人）

調査②の結果、学生の評価が特に高かったのは、「③学級担任としてどう対応するか？～いじめ・不登校・特別支援教育～」と「⑦突然、保護者から苦情電話が！あなたはどう対応しますか？」であった。この二つを選択した学生は、次のように感想を書いていた。

どの授業も初めて経験するものでした。でも、こんなことが来年からは日常で起こるかもしれないと考えると、ちゃんと対応できるか心配です。しかし、この授業を思い出して何とかできるかなという希望や自信をもつことができました。いろいろな問題を知るだけでも自信につなげることができると思います。

現場で必ず経験するような具体的な事象を知り、複数の人たちで話し合うことで、今まで全く知らなかったことについて理解を深めることができよかったです。授業を受ける前は「学級担任になったらどうしよう」という不安ばかりだったけれど、少しでも見通しを付けることができたように思う。まだ理想の教師像を確立したというわけではないけれど、指導の方法や、普段や災害時などの教師の姿を知ったことで、これからどんな教師になりたいのか少しずつ見えたような気がしました。ありがとうございました。

③と⑦で扱った、いじめ・不登校、特別なニーズのある子どもへの対応、保護者対応は、現場の担任の多くが抱えている課題である。二つの評価が高かったのは、多くの学生が、自分が学級担任としてこれらの課題に直面することに不安を感じているからだと考えられる。「②ちょっと気になる子どものいる学級での対応」の評価が高いことや、自由記述の回答にある子どもへの対応の仕方と学級崩壊も同じ理由である。また、「①始業式後の学級開きの所信表明で何を話しますか？」が高いのは、自分の教育方針や信念の不十分さを感じたからだと推測される。この授業では、担任した子どもたちと保護者を対象にして学級経営方針を語らせた。先の「教職実践演習自己評価カード」の記述にあるように、自分の教師としての信念の不十分さと、自分の考えを言葉で人に伝えることの難しさを感じていた。

(3) 調査③

事前と事後でスタンダードのⅠからⅢの各項目について、「ぜんぜんそう思わない」「あまりそう思わない」「だいたいそう思う」「そう思う」の4件法でアンケート調査を行った。その後、事前と事後の学生の自己評価について、「ぜんぜんそう思わない」を1点、「あまりそう思わない」を2点、「だいたいそう思う」を3点、「そう思う」を4点として得点化した。時期水準(2)×スタンダード評価項目(15)の分散分析を行った結果、時期水準(2)とスタンダード評価項目(15)の交互作用が有意だった。 $F(14,532)=2.03, p<.05$

表4 スタンダードに照らした自己評価(事前・事後)

スタンダード	質問	事前	事後	差
Ⅰ-1	①教育に対する使命感や情熱をもち、自己の教育理念を確立する。(目指す教師像を確立する)	3.00	3.59	0.59
	②常に子どもから学び、共に成長しようとする姿勢が身に付いている。	3.21	3.69	0.48
Ⅰ-2	③現在学校で生じている教育課題を理解し、解決の見通しをもつことができる。	2.23	3.10	0.87
	④高い倫理観と規範意識、困難に立ち向かう強い意志をもち、自己の職責を果たすことができる。	2.77	3.23	0.46
Ⅰ-3	⑤子どもの成長や安全、健康を第一に考え、適切に行動することができる。	2.90	3.49	0.59
Ⅰ-4	⑥自己の言動を振り返って課題を見出し、次に生かすことができる。(反省的実践を営む基本的な姿勢を身に付けている。)	3.10	3.64	0.54
Ⅱ-1	⑦教員としての職責や義務を理解している。	2.90	3.44	0.54
	⑧教員として、目的や状況に応じた適切な言動をとることができる。	2.54	3.21	0.67
Ⅱ-2	⑨組織の一員としての自覚をもち、他の教職員と協力して職務を遂行することができる。	2.90	3.56	0.66
Ⅱ-3	⑩保護者や地域の関係者と良好な人間関係を築くことができる。	2.72	3.28	0.56
Ⅲ-1	⑪子どもに対して公平かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行うことができる。	3.18	3.54	0.36
Ⅲ-2	⑫子どもの発達や心身の状況に応じて、抱える課題を理解し、適切な指導を行うことができる。	2.46	3.00	0.54
Ⅲ-3	⑬子どもとの間に信頼関係を築き、受容的な学級経営を行うことができる。	2.80	3.26	0.46
	⑭学校・学級の約束事の大切さを理解し、学級集団を把握して、規律ある学級経営を行うことができる。	2.56	3.15	0.59
Ⅲ-4	⑮子どもの実態や学校の教育課題を踏まえて、結果や成果を意識しながら学級経営の評価を行うことができる。	2.31	2.97	0.66

調査③の結果、授業によって、伸びの小さな項目と伸びの大きな項目があることが分かった。

伸びの小さな項目は、次の四つである。

- ⑪子どもに対して公平かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行うことができる。(Ⅲ-1)
- ④高い倫理観と規範意識、困難に立ち向かう強い意志をもち、自己の職責を果たすことができる。(Ⅰ-2)
- ⑬子どもとの間に信頼関係を築き、受容的な学級経営を行うことができる。(Ⅲ-3)
- ②常に子どもから学び、共に成長しようとする姿勢が身に付いている。(Ⅰ-1)

これら四つに共通しているのは、事前の数値が高いことである。15項目全体の事前の平均が2.77なのに対して、これら四つの平均は2.99であり、特に⑪と②は約3.2と4段階の3を超えた評価になっている。これら四つの項目は、子どもとの交流や信頼関係の構築、自己の職責や子どもと共に学ぶ姿勢に関わるものである。受講生は、前年度計4週間の教育実習を経験している。教育実習の現場で実際に子どもと関わる中で、四つの項目を高めることができたものと考えている。教育実習の成果と言える。²⁾そして、事前の数値が高いにもかかわらず、0.36~0.48の伸びがある。11回の授業を通して、学生が自分自身を見つめ、教員として求められる使命感や責任感及び児童生徒理解や学級経営の大切さを自覚した結果であると考えている。

反対に、伸びの大きな項目は、次の四つである。

- ③現在学校で生じている教育課題を理解し、解決の見通しをもつことができる。(Ⅰ-2)
- ⑧教員として、目的や状況に応じた適切な言動をとることができる。(Ⅱ-1)
- ⑨組織の一員としての自覚をもち、他の教職員と協力して職務を遂行することができる。(Ⅱ-2)
- ⑩子どもの実態や学校の教育課題を踏まえて、結果や成果を意識しながら学級経営の評価を行うことができる。

(Ⅲ-4)

これら四つは、事前の数値の平均が2.50と、全体と比べて低くなっている。差が0.87と、一番伸びが大きかったスタンダードⅠ-2と関連した授業は、次の五つである。

- 第1回 始業式後の学級開きの所信表明で何を話しますか？(演示)
- 第3回 学級担任としてどう対応するか？～いじめ・不登校・特別支援教育～(集団討論)
- 第4回 学級内で日々発生する様々な問題に学級担任としてどう対応するか？(集団討論)
- 第9回 校外学習へ出かけよう！そのために考えておきたい10のこと(ワークショップ)
- 第10回 自分の身は自分で守る！子ども自身の危機管理能力を育てよう！！(ロールプレイ)

これら五つの授業で扱った内容は、教育実習では体験できない課題であり、担任となったときに直面するであろう課題である。このような場面があることは知っていたであろうが、実際に演習を通して対応のポイントを理解した結果、伸びが大きくなったと考える。

また、スタンダードⅡ-2にある組織的対応については、ほとんどの学生が知らなかった内容である。学校は組織で動いていること、だから一人で悩まないようにすることを授業担当者が繰り返し指導してきた。若手教員の早期退職が問題となっている今、学生が組織的対応について知ることができたのは意義あることである。

5 おわりに

今年度実践した教職編11回の授業は、担任への意識が高まっている学生のニーズに応え、教員として必要な資質能力の育成を図ることができるものであった。これは、授業内容及び方法を、小中学校勤務を積んだ教員が構想したからである。担任として必要な知識や技能を、学校現場で起こりうる場面と関連させて授業を構成した結果である。教職実践演習の教職に関する授業は、学校現場の視点を生かして、起こりうる場面を想定して演習を行うことが効果的であることを確かめることができた。

しかし、今回の実践は、中央教育審議会答申にある「学生は、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図る」ことについては不十分であった。学生の自主性と教員として必要な知識や技能をどのようにしてつなげる構成にするかが課題として残った。

今後、この授業を受講し教員となった卒業生の意見を参考にするなどして、教職生活をより円滑にスタートするための心構えをもたせる授業づくりの充実が一層求められる。

本実践研究は、2011年に上越教育大学学校教育実践研究センターに在籍した、次の教員の協働研究である。

教 授 釜田 聡、石野正彦
特任准教授 中野博幸、渡辺径子、清水雅之、中野英康、亀山 浩、金子淳嗣

[注]

- 1) 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」(2006年7月)
- 2) 上越教育大学は、分離方式初等教育実習(5月1週間を「観察実習」、9月から3週間を「本実習」、「観察実習」と「本実習」の間を「研究期間」とする)を実施している。